岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

原因・理由を表すテ形接続に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 由紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/22217

原因・理由を表すテ形接続に関する一考察

A Study of Conjunctive Usages Which Indicate Cause and Reason, Using Te-form

加　藤　由紀子

要旨

テ形接続は、日常的な場面での使用頻度が高いため、その意味は多様かつ多義である。またそれゆえに、多くの誤用の原因となっている。特に、テ形接続で原因・理由を表す文は、初級レベルの文法項目として多くのテキストに提出されているが、テキストの中での扱いは、慣用的な使用に限定されたような簡単なものでしかない。そのため、学習者にその用法が十分理解されておらず、中・上級の学習者にも多くの誤用が見られる。

また、この用法は、「ので・から」を使用する複文ほど、原因・理由の意味が明確に表れないため、先に学習する継起的用法と混同され、誤用となるものが多い。それに加えて、原因・理由を表すテ形接続の文は、純粋にその意味を表すものより、継起的意味を合わせ持つものが多く、それが文法的な位置付けを曖昧にしている。

本稿では、日本語学習者が作った誤用文を分析することから、テ形接続で原因・理由を表す複文に現れる形容詞・動詞・モダリティーの種類と文の構造および意味との関係を考察し、この用法に関する具体的な注意点を明らかにすることを試みた。

1. はじめに

従属節がテ形をとる複文は使用頻度が高いため、日本語教育の中では重要な学習項目であり、初級でその多くの用法が扱われる。しかし、用法が多様で、その意味も多岐にわたるため、誤用が多く見られる。その中でも、日本語学習者から多くの誤用が出るものに、原因・理由を表すテ形接続がある。

「送ってくれて、ありがとう。」「遅れてすみません。」などは、日常会話に必要な表現であることから学習の必要性もあり、決まった表現であるため間違いも少ない。しかし、応用的な文になると、中級・上級の学習者でも適切な運用は難しく、誤用が見られる。

本稿では、実際に学習者から出て来た誤用文の分析を通して、誤用の原因とこの用法に関する注意点について考察する。

2. 先行研究

(1) 日本語のテキストおよび指導書の解説

原因・理由をテ形で表す複文についての解説は、初級のテキストや指導書にある。その主なものを、以下に記す。

1)『みんなの日本語初級Ⅱ　教え方の手引き』(p.134)

前件（Vて／Vなくて）は、後件の原因を表す。後件に意志を含んだ表現は来ない。この課で

は後件に主に「びっくりする」「安心する」「困る」「うれしい」「悲しい」「寂しい」「残念だ」などの表現を中心に扱う。また、前件が先で、後件があとに起こるという時間的前後関係がある。

『同書』(p.136)

前件が、い形容詞、な形容詞の場合でも、動詞の場合と同様、後件に意志を含んだ表現は用いられない。ここでは後件に可能動詞の否定形や、可能の意味を持つ動詞「できます」「わかります」などの否定形が来るものを中心に扱う。動詞の場合と同様、前件は後件の原因・理由を表す。

2)『新文化初級日本語Ⅱ　教師用指導手引き書』(p.92)

27課　ここで学習するのは、「ある状態が原因で、～できない」という形になるものである。教科書には前件の状態を表す部分が形容詞のものだけを例文に挙げたが、これ以外にも、状態を示す動詞（いる、ある、など）や「すぎる」を使った表現などもある。

『同書』(p.149)

34課
- 困っていることや大変なこと、うれしかったことなどの理由を表す「～て」「～なくて」を学習する。
- 「困っている」「大変だ」のような、状態を表す言葉とともに使われる場合は、「なくて」「ないで」両方が用いられることがある。
  しかし、個人の語感の差で、「ないで」は不自然だと感じる人もいるため、ここでは「～なくて困っています」「～なくて大変です」のような形を練習する。
- 人がいるかいないかや物の有無を表す内容の場合は、必ず「なくて」の形をとる。
- 前件に自分の意志で変えられる内容が来ると不自然になるので注意する。

初級テキストの指導書であるため、ここで扱う指導内容を限定することで、誤用文を出さないようにするための配慮があることが分かる。しかし、この用法を発展的に使うための十分な説明はない。

(2) 日本語学習者のための文法学習書

3)『どんな時どう使う日本語表現文型200』(p.41-42)

1.「～て」の前が原因・理由を表す。原因・理由を表す「～て」の前の文と後ろの文の主語が違っていてもいい。

2.「～て」の後ろの文には不可能表現や心的または身体的な状態を表す表現（困る、たいへんだ、疲れた、など）がくることが多い。話す人の意志を表す文や、相手への働きかけの文はこない。

※話す人の意志を表す文（p.204）

意志「～ましょう」	意志表明「～ます」
決意表明「～よう」	意図「～つもりです」
意図「～ようと思っています」	決心「～ことにします」
希望「～たいです」	

※相手への働きかけのある文（p.204）

禁止「～するな」	禁止「～てはいけません」
命令「～しろ」	命令「～なさい」
依頼「～てください」	勧誘「～ましょう」

申し出「～ましょうか」　　提案「～ませんか」
提案「～たらどうですか」　　要求「～てほしいです」
許可「～てもいいですか」　　指示（義務）「～なければなりません」
忠告「～たほうがいいですよ」　指示「～なくてもいいですよ」

3. 動詞の「て形」の否定形は「V なくて」「V ないで」とふたつあるが、理由を表す場合は「V なくて」を使う。どんな状態で動作したかを表すときは「V ないで」を使う。

4）"A Dictionary of Basic Japanese Grammar"（pp.466-467）

「ワインを飲みすぎて、頭が痛い。」
「このスープはからくて飲めない。」
「私はテニスが大好きでよく友達とする。」
「伊藤先生は今週病気で、かわりに村田先生が教えた。」

前件が後件の理由・原因となる文で、テ形を使ったこの用法は、非常に一般的である。（説明文を筆者が和訳）

5）"A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar"（pp.211-214）

（例文は全部で 10 出ているが、文法説明は 4）とほぼ同様で、「なく」「なくて」「ないで」の用法の違いの説明だけである。）

3）は初級学習者のためのもので、原因・理由のテ形接続について全体的な説明が割合詳しくなされている。しかし、4）5）には、実際にどのように文を作るのかについての説明がほとんどない。

(3) 日本語教師のための参考書

6）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（p.191）

「子どもが生まれて、家がにぎやかになりました。」

・・・継起や原因・理由の「～て」の場合は、・・・・「子どもが」のように独自の主語を示すこともできます。

『同書』（p.192）

「お金が足りなくて、電車に乗れません。」
「彼が来て安心した。」「彼が（×来ないで／○来なくて）心配した。」
「料理がおいしくなくて、半分残した。」

7）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（pp.439-441）

（『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』の例文および説明と、ほぼ同様で、「ず」「ずに」の説明が加わっているだけである。）

上記の 6）7）は、日本語教育に携わる者が文法を確かめたり学んだりする時に使用する参考書であるが、ここには日本語学習者が参考にするもの以上の内容は書かれていない。

(4) 専門書

8）『日本語のシンタックスと意味Ⅲ』（pp.219-220）

動的動詞の場合は、・・・並んだ順にそのことが生起する（した）意味を伴うのがふつうであるが、テ形による接続はいっそうその感じが強くなる。とくに主格が同一の場合にそうなる。その点、動的動詞の場合は、並列的であっても、純粋に並列といえるのは、むしろまれであるといってよいかもしれない。並んだ述語句の入れ替えができないからである。・・・・・・・・一般に、動的動詞の、一方が否定の形、他方が肯定の形で並列的に結びつく場合は、・・・・・前者が「～

ナイデ」または「～ズニ」の形になる。・・・・・・「～ナクテ」という形をとると、前項が後項の原因である意味を生じるのがふつうである。・・・・・・逆に、状態性の動詞は、あとで見る形容詞の場合と同じく、「～ナクテ」の形が並列的でも、あとで見るように因果関係的（つまり主従的）結合にも使われる。

9)『日本語文法の発想』(pp.297-298)

(接続と文脈展開に関する説明の後、原因・理由の2例文の提示のみ)

10)『複文』(pp.14)

連用形による接続の場合が文字通り並列の表現として用いられるのに対して、「～て」の形式による接続の場合は、しばしば連用節に相当する使われ方があるという点である。(この後に、原因を表す例文の提示と、「～なくて」「～ないで」の説明がある。)

11)『基礎日本語文法』(p.187)

テ形は、並列の関係を表現する用法に加えて、述語を修飾する用法、すなわち、副詞節を作る用法を持つ。副詞節として働く場合、具体的には、原因、手段、付帯状況、等を表す。(この後にそれぞれの用法の例文提示)

以上の内容を見ると分かるように、学習者がこの用法を自由に使えるようになるための十分な説明がないのが現実である。この中で最も詳しい説明がなされているものは、『どんなときどう使う日本語表現文型 200』であるが、それでも十分とは言えない。また、専門書をはじめ日本語教師が参考にする本の中にも、教師が現場ですぐ使えるような説明がない。

3. 誤用文の分析

この章では、日本語学習者が実際に作った誤用文のいくつかを取り上げて、誤用が出て来る原因を探っていくことにする。ただし本稿では、2で挙げられているような基本的文法事項に従わなかったことから発生する誤用文は扱わない。

3.1 後件に感情を表す形容詞・動詞が来る場合

「～て、うれしい」という文の前件が、「お金があって」「天気がよくて」「子どもを授かって」のように無意志である場合は問題が出て来ることが少ない。それは、前件のような状態が、後件で表される感情をもたらすという意味になるからである。しかし、前件が意志動詞の場合には、適格文になるものと非文になるものがある。(以下、＊は非文を、？は非文とは言えないまでも完全ではないと思える文を示す。)

＊1) 友達に会って、うれしい。

2) 友達に会えて、うれしい。

3) 友達に会って、うれしかった。

これらの例文から、後件に主語（これは主文の主語となるため、以下、「主体」と記す。）の現在の感情を形容詞で表す表現が来る場合、前件は主体（話者）の意志でコントロールできない事柄でなければならないことが分かる。また、例文1が「偶然友達に会った」場合であっても、「会う」という動詞が、意志動詞であるために、適格文にはならない。しかし、意志動詞も、例文2のように可能形になると、意志でコントロールできない状態を表す文となり、適格文となる。さらに、例文

3 を見ると分かるように、後件が過去の感情を表す場合は、過去の出来事の描写となり、問題はなくなる。

それでは、前件の主語が主体と異なる場合はどうなるのであろうか。

＊4)　彼女が料理を作って、うれしい。

5)　彼女が料理を作ってくれて、うれしい。

？6)　彼女が料理を作って、うれしかった。

例文 4 は、前件の内容が他者の行為であるため、主体がコントロールできないことであるにもかかわらず非文になる。それに対して、例文 5 が適格文になるのは、前件が主体（話者）に恩恵をもたらすことが明確に表れている文であるためである。

例文 3 は、後件をタ形にすることで適格文になったが、例文 6 はタ形であっても不自然な感じを与える。これは例文 4 と同様に、前件と後件の主語が異なり、主体に前件の内容がどのように影響して「うれしかった」につながるのかが明確ではないからである。つまり、前件と後件の主語が異なる場合には、テンスにかかわらず、前件の内容が主体に影響を与えていることを明確にしなければならないのである。

＊7)　友達が手紙を読んで、恥ずかしい。

8)　友達に手紙を読まれて、恥ずかしい。

例文 7、8 も例文 4、5 と同様に、前件の内容が主体にどう関わってくるかが明確である例文 8 は適格文になるが、それがはっきり表れない例文 7 は非文となる。

次に感情を表す動詞が後件に来る場合を考えてみる。

＊9)　財布を落として、困る。

10)　財布を落として、困っている。

11)　財布を落として、困った。

上の 3 つの例文を比べると分かるように、これは後件の動詞の形の違いがテンスおよび意味の違いとなるために生じる問題である。「困っている」であれば現在の心理的な状態を表すことになるので適格文となり、「困った」であれば過去の事柄を描写しているので、これも適格文となる。しかし、例文 9 を読んで、まず非文であると感じるのは、前件の述語が動詞であることから、後件が前件に続く事柄であると自然に聞き手が判断するためである。つまり、聞き手（読み手）は、この文を原因・理由の文とは考えず、単に継起を表す複文であると判断するため、未来の感情を表す「困る」を不適格なものであると感じるのである。しかし、これは一回性の出来事である場合のみに言えることであって、習慣性のものであれば、非文にはならない。

12)　しょっちゅう財布を落として困る。

ただし、例文 12 を見ると分かるように、「しょっちゅう」等の副詞を補うことで、習慣的に起こる事柄であることを明らかにすることが、適格文となるためには必要となる。

それでは次に、動詞で問題が出やすい、前件に意志動詞が来る場合を取り上げ、どのような文であれば適格文になるのかについて考えてみる。

＊13)　友達がお祝の電話をかけて、父は喜んでいる。

14)　友達がお祝の電話をかけてくれて、父は喜んでいる。

？15)　友達が無理にお酒をすすめて、困っている。

16)　友達に無理にお酒をすすめられて、困っている。

上の4つの例文を見ると分かるように、前件と後件の主語が異なり、前件に意志動詞が来る場合は、形容詞の場合と同様、前件の内容が明らかに後件の原因となり、前件が主体に影響を与えていることが分かる時にのみ適格文となるのである。

以上のことから分かるのは、前件が意志動詞で後件も動詞の場合、それがテ形接続であれば、聞き手（読み手）は自然に継起的な用法であると解釈してしまうということである。このような現象を引き起こさないためには、前件が原因・理由を表すものであることを明らかにする必要が生じる。その時によく使われるのが、授受動詞の補助的使用、受身形・使役形の使用等である。

それでは、例文10～12、14、16に継起的な意味はないのかというと、それぞれの文で程度の差こそあれ、継起的意味がないとは言えない。確かに原因・理由という意味はあるが、これらの文は継起の意味も合わせ持っているのである。これが、前件に意志動詞が来る場合に誤用が出やすくなる原因のひとつである。

3.2 後件が主体の判断を表す場合

一般的に、テ形接続の複文の後件には感情を表す述語が来るが、感情ではなく判断を表す形容詞が来る場合はどうであろうか。

＊17） 若くて、残業しても大丈夫です。

この文を「若いので／から、残業しても大丈夫です。」とすれば問題はないのに、どうしてテ形を使うと誤用文になるのであろうか。

この問題を考えるには、文の構造を考える必要がある。

［若くて、残業しても］大丈夫です。

［若いので／から］、残業しても大丈夫です。

上の括弧でくくった文を見ると分かるように、ここで問題となるのは、文の切れ目である。原因・理由を表す「ので」「から」は、それらの言葉の後に明確な切れ目を作る。これに対して、テ形の場合は、それが原因・理由を表すものであれ、継起や並列を表すものであれ、テ形の前と後の語の結びつきが強く、文の中に切れ目を作る他の要素が現れると、テ形の後に切れ目ができなくなる。これは従属節の主節に対する従属の程度に関係する。

従属節の従属度について、益岡隆志・田窪行則（1991: p.189）は、「従属節の中には、主節に対する従属の度合の高いものもあれば、低いものもある。従属の度合の高い従属節は、主節に近い性質のものであり、現れ得ない表現の範囲が広い。」としている。そして、従属度をはかる表現として、提題表現、丁寧表現、テンスの表現を挙げ、それらが従属節に現れる場合は従属度が低いと述べている。これに従えば、ノデ接続・カラ接続にはこの3つの要素が入れられるのに対して、テ形接続で原因・理由を表す従属節の場合には、「Vまして」を使う丁寧表現が入れられる可能性はあるものの、提題表現・テンスの表現を入れるのは難しいことが分かる。つまり、ノデ接続・カラ接続の方が、テ形接続より独立性が高いということである。これが、ノデ・カラの後に切れ目が生じさせる原因である。

また、例文17の「残業しても」のテモは、「テ形＋も（とりたて助詞）」からなっており、テモ接続には「Vまして」の丁寧表現の他に提題表現が入れられる。一方、テ形接続は、前述のとおり提題表現が入れられない。つまりテモ接続はテ形接続よりも独立性が高いのである。そのため、テ形の後ではなく、テモの後に文の切れ目を作ることとなり、「若くて残業する」がひとつながりになっ

てしまうのである。しかし「若くて残業する」という文は意味をなさないため、誤用文になるのである。

18）　若くて経験がなくても大丈夫です。

例文 17 に対して、例文 18 を適格文であると感じるのは、「若くて経験がない」がひとつながりで意味をなしているため、それに「大丈夫です」がついても問題がないからである。しかし、例文 18 は本稿で検討する原因・理由の文ではない。

それでは、前件が動詞の場合はどうであろうか。

＊ 19）　車を買って、通勤が便利だ。

20）　車を買って、通勤が便利になった。

21）　車があって、通勤が便利だ。

以上の 3 つの例文から分かるように、例文 19 のように、前件が意志動詞の場合、主体の判断を表す文は後件に来ない。また、この例文では、前件と後件の内容が離れ過ぎていて、前件の内容が後件の原因・理由としてどのようにつながっているかが明確でないことも非文となる原因になっている。例文 20 のように、前件が意志動詞の場合でも、後件に前件の行為のために変化したという状態を表す文が来れば適格文になる。しかしこの場合は、原因・理由を表すテ形接続というだけでなく、継起の要素もかなり強くなる。この例文だけでなく、原因・理由を表すテ形接続の文には、例文 20 のような原因・理由と継起の中間的な意味を持つ文がかなりある。この視点から例文を見ると、以上の 3 つの例文の中で、純粋に原因・理由を表すものは、前件が無意志動詞である例文 21 だけであると言えよう。これらのことから、テ形接続で後件に判断を表す形容詞が来る場合、それらの文の前件は、無意志動詞で原因・理由を表すものと、意志動詞で原因・理由と継起の意味を合わせ持つものとの二種類があることが分かる。

3.3　前件の形容詞の違いで問題が出て来る場合

＊ 22）　先生はおもしろくて、みんなを笑わせた。

23）（弟にたたかれた）太郎はくやしくて、弟を泣かせた。

例文 22 と 23 は、文型がほぼ同様で、文法的な違いがあるようには思えないにもかかわらず、例文 22 だけが非文になる。

これは、形容詞の性質によるものと考えられる。まず、「おもしろい」「くやしい」と感じるのはだれか、ということである。おもしろいと感じるのは先生を見ている「みんな」であり、先生自身がおもしろいと感じているのではない。一方、「くやしい」と感じているのは、太郎自身である。この違いが、適格文になるかどうかの違いにつながる。

？ 24）　先生はやさしくて、学生を感動させた。

例文 24 は例文 22 ほど違和感がない。それは、「やさしい」という形容詞が、先生に対して学生が感じていることであると同時に、先生の性質を客観的に表す表現でもあるためだと考えられる。しかし「くやしい」ほど明確には主語の性質や気持ちを表す語ではないので、適格文であるとまでは言えないのであろう。

例文 22、24 のような性質を持つ形容詞が前件に来る場合は、後件は使役形を取らない。これはテ形接続だけでなく、「ので」「から」の接続でも同様である。

＊　先生はおもしろいので／から、みんなを笑わせた。

（弟にたたかれた）太郎はくやしいので／から、弟を泣かせた。

? 先生はやさしいので／から、学生を感動させた。

しかし、使役形ではない形を取れば、適格文になる。（ただしこの場合は、後件が主節になるので、前件の助詞は「が」をとることになる。）

25） 先生がおもしろくて、みんなは笑った。

＊26） （弟にたたかれた）太郎がくやしくて、弟は泣いた。

27） 先生がやさしくて、学生は感動した。

しかし、適格文である例文23を例文26のように変えて後件を使役形でない文にすると、全く意味が分からない文となってしまう。しかし、その原因は、後件が使役形かどうかにあるのではない。

28） （弟にたたかれた）太郎はくやしくて、弟をたたいた。

例文28を見ると分かるように、前件の形容詞が前件の主語の性質を表す文の場合には、主体と前件の主語が同じである必要があるからである。

これらのことから、前件の形容詞が前件の主語の感情や性質を表す場合には、前件の主語は主体と同じになり、前件の形容詞が前件の主語の感情や性質を表さない場合は、主体がそのように感じた人になることが分かる。つまり、前件が形容詞を使って表す内容は、主体自体のことか、主体が感じたり思ったりしたことでなければならないのである。

3.4 前件の移動動詞によって問題が生じる場合

?29） 国へ帰って、友達に会えた。

30） 国へ帰って、友達に会うことができた。

例文29は、「国へ帰ったので、友達に会えた」という文を、そのままテ形で原因・理由を表そうとしたことによって出現した誤用文である。これが適格文だと言いきれないのは、前件の動詞が意志的な移動動詞であるためである。つまり「国に帰って、友達と会う／会った」のように、必然的にテ形で順序を表す継起的な用法であると、聞き手（読み手）が考えてしまうからである。この現象については、3.1の前件が意志動詞になる例でも述べたことであるが、前件が意志動詞の中でも特に移動動詞になる場合には、この傾向が顕著になる。

しかし、後件が同じ可能を表すものであっても、例文30のように、「会うことができた」にすると適格文となる。この文の構造を考えると、以下のようになる。

［国へ帰って、友達に会う］ことができた。

これを見ると分かるように、例文30は例文29と意味的には同じであっても、原因・理由を表すテ形の複文ではない。前件の「帰る」が移動の動詞であるため、順序を表す継起の文になっているのである。

それでは移動を表す動詞が前件に来る場合には、原因・理由を表す接続の文にはならないのであろうか。

31） 久しぶりに家に帰って、よく眠れた。

構文的には例文25と似ているが、例文31は原因・理由を表す接続の文である。それは、「家に帰る」と「眠る」という言葉の間の関係が明白で、当然の予測として、前件が後件の原因・理由であると聞き手（読み手）が判断するからである。しかし、これも純粋に原因・理由のテ形接続かというとそうではなく、継起の意味が含まれている。

また、移動の動詞をテ形接続で複文にする場合に、前件と後件の主語が異なると、さらに多くの誤用が出る。たとえば例文32のような文である。

＊32）　友達が家に来て、私は料理を作った。

この例文は前に出たいくつかの例のように、「ので／から」を使って、「友達が来たので／から、私は料理を作った」にすれば適格文になるものである。しかし、テ形接続の場合は、3.2で述べたように、テ形に多様性・多義性があるため、前件と後件の関係が明確でないと、どの用法として使用しているのかが分からないために、意味が通じなくなってしまうのである。

33）　子犬が家に来て、家庭がなごやかになった。

34）　子犬が家に来て、前からいる猫がやきもちを焼いた。

例文33の後件は状態を表し、例文34の後件は動作を表しているが、これらを見ると分かるように、前件と後件の主語が異なる場合でも、状況が容易に考えられる場合は、適格文になる。

それでは、前件が移動動詞のテ形接続で適格文となる条件は何であろうか。それは、前件の主語の移動によって後件の事態が引き起こされるような場合であり、同時にその状況・状態が聞き手（読み手）に明らかな文になっている場合である。ただし、前件に移動動詞が来る場合は、純粋な原因・理由の意味になることはほとんどなく、継起的な意味が加わる。

3.5　モダリティーで問題が生じる場合

原因・理由を表すテ形接続の複文の場合、後件には様々な規制がかかる。モダリティーもそのひとつである。

＊35）　暑くて、窓を開けなければならない。

36）　熱があって、休まなければならない。

例文35は、『どんなときどう使う日本語表現文型200』の解説に誤用として出ていた非文を普通形にしたものである。そこには、テ形接続の後件に、話す人の意志・気持ちを表す文と相手への働きかけのある文（2.に具体的な例を示した）は来ないとの記述があり、相手への働きかけの表現の中に、指示「～なければなりません」が含まれている。

しかし、例文36は、非文とされた例文35と構成が似ているが、適格文である。この違いは、「～なければならない」の主体の違いから生じるものである。例文35では、「窓を開けなければならない」のがだれか明確ではない。それに対して、例文36で「休まなければならない」のは、「熱がある」主体（この場合は話者）であることが明らかである。つまり、この場合は、「～ならなければならない」の意味は、解説にあるような相手に対する指示なのではなく、主体自身についての避けられない事態を表す表現となっているのである。そのため、非文にならないのである。

＊37）　友達の車をぶつけて、あやまらなければならない。

それでは、例文37の場合は、後件が自分に対する義務を表す文であるにもかかわらず、どうして非文になるのであろうか。まずそれは、これまでにも述べてきたように、「友達の車をぶつける」と「あやまる」との関係が、「ので／から」による接続では明確であるのに対して、テ形接続では明確さを欠くためである。さらに、前件が状態ではなく意志動詞であることも、この文の成立を難しくしている。

これらのことから、以下のことが言える。後件に「～なければならない」が来て適格文になるためには、前件が無意志の述語であり、主体は話者自身で、避けられない事態を表現する文であるこ

とが必要条件となる。

＊38）　暑くて、窓を開けようと思っている。

39）　お金がなくて、友達に借りようと思っている。

例文38も例文35と同様に、『どんなときどう使う日本語表現文型200』に、話す人の意志・気持ちを表す非文の中のひとつ「意図」として出ている例文を普通形に変えたものである。しかし、例文38は非文であるのに対して、例文39は非文にならない。

同様に、同書では「決心」を表す「ことにします」も非文として扱っているが、次の例文40は非文にはならない。

40）　住民からの要請があって、この問題を再調査することにします。

例文39と40に共通しているのは、前件の内容が、後件にどうかかわってくるかが明確であることである。つまり、例文39の前件の主語は、後件で省略されている目的語の「お金」であり、例文40の前件で「住民が要請した」内容は、後件に出て来る「この問題を再調査する」べきことであることが容易に理解できるということである。

このことから、基本的にはテ形接続の後件に、話す人の意志・気持ちを表す文と相手への働きかけのある文は来ないが、それが話者である主体の避けられない事柄である場合や、前件の主語が直接後件の目的語になるなど、前件の内容が後件の内容に直結するような特別な場合に限り、話す人の気持ちが表れる文で適格文になるものがあることが分かる。

さらに、これらの適格文について、その文構造を考えてみると、以下のようになる。

36)'［熱があって、休ま］なければならない。

39)'［お金がなくて、友達に借り］ようと思っている。

40)'［住民からの要請があって、この問題を再調査する］ことにします。

このことから分かるように、文構造は、

パターンA：［前件＋後件］＋モダリティー

のようになっているのであって、

パターンB：　前件＋［後件＋モダリティー］

という構造になっているわけではない。これに対して、非文となった例文37、38は、意味的にはパターンBでなければならないために、この原則に反することになるのである。構造を明らかにするために、テ形接続ではなくノデ接続にすると、以下の通りである。

37)'　友達の車をぶつけたので、［あやまら ＋ なければならない］。

38)'　暑いので、［窓を開け ＋ ようと思っている］。

以上のことから、テ形接続で原因・理由を表す複文の文末につくモダリティーは、後件にのみに影響を与えるものではなく、文全体に影響を及ぼすものでなければならないことが分かる。

4.　まとめ

いくつかの誤用文を検討することから、テ形接続で原因・理由を表す複文には以下のような性質があることが分かった。

①後件が話者の感情を表す場合、前件はその主体がコントロールできないものでなければならない。そのため、必然的に前件の述語は無意志動詞になるか、主体以外の主語の意志動詞の文に

なる。

②この用法では、前件の内容が原因・理由となって、後件に直接影響を与えることが明確に分かるような文でなければならない。そのためには、授受動詞の補助的使用、受身形・使役形・副詞等の使用で、前件と後件の関係が、原因・理由として結びついていることを、「ので・から」の複文以上に明らかにする必要がある。

③テ形接続は、テ形の前の内容とすぐ後ろの内容のつながりが強い。そのため、ひとつの文の中にテ形より強い切れ目を作る語が現れると、テ形接続の文中の意味・役割が変わることがある。

④後件に判断を表す形容詞が来る複文の前件には、無意志動詞で原因・理由を表すものと、意志動詞で原因・理由と継起の意味を合わせ持つものの二種類がある。

⑤前件に感情・性質を表す形容詞が来る場合、形容詞を使って表す内容は、主体自体のこと、あるいは他者について主体が感じたり思ったりしたことでなければならない。

⑥前件に移動動詞が来る場合、普通は継起的な意味だと聞き手（読み手）が判断してしまうため、原因・理由の意味として成立しない場合が多い。また、純粋な原因・理由だけの意味になることはほとんどなく、多くの場合は継起的な意味も合わせ持つものとなる。

⑦基本的にはテ形接続の後件に、話す人の意志・気持ちを表す文と相手への働きかけのある文は来ないが、それが避けられない事柄である場合や、前件と後件の内容の関係が明らかな場合だけは、話す人の気持ちが表れる文で適格文になるものがある。またこの場合、モダリティーは後件のみに影響があるものではなく、文全体に影響が及ぶものとなる。

⑧テ形接続の複文が適格文になるかどうかを決定する要素は、動詞や形容詞等の種類・形や文型だけではない。前件の内容から、聞き手（読み手）がどの程度後件の内容を予測しうる文であるかあるいは状況であるかということも大きな要素である。

本稿では、日本語学習者の誤用文から、原因・理由を表すテ形接続の複文の分析をし、その使用のための注意点を具体的に示すことを試みた。しかし、ここで扱った形容詞や動詞は、日本語学習者が作った誤用文に登場したものだけである。テ形接続の複文を総合的に詳しく見ていくためには、形容詞および動詞を種類・性質別に取り上げ、それぞれの例文を検証していく必要がある。今後の課題は、種類・性質の異なる述語と、原因・理由を表すテ形接続の文との関係、原因・理由の用法と継起的用法との中間に位置する文との関係、テンスとの関係を明らかにしていくことである。

参考文献

(1) 先行研究文献

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房

坪本篤郎（1998）「条件と時の連続性」『日本語の条件表現』くろしお出版

寺村秀夫（1992）『日本語のシンタックスと意味Ⅲ』くろしお出版

中川裕志（1998）「複文における因果性と視点」『視点と言語行動』くろしお出版

益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版

益岡隆・田窪行則（1991）『基礎日本語文法』くろしお出版

森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房

国立国語研究所（1994）『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
(2) 教科書および指導書
白川博之監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
スリーエーネットワーク
スリーエーネットワーク編著（1999）『みんなの日本語初級Ⅰ』
（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』
友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2000）『どんなときどう使う日本語表現文型 200』
（1996）『どんなときどう使う日本語表現文型 500』
アルク
文化外国語専門学校編（2000）『新文化初級日本語Ⅱ』
（2000）『新文化初級日本語Ⅱ教師用手引書』凡人社
Seiichi Makino and Michio Tsutsui （1986）"A Dictionary of Japanese Grammar"
（1995）"A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar"
The Japan Times